

☆年間第29主日(10月18日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 45章 1、4～6節)

主が油を注がれた人キュロスについて主はこう言われる。
わたしは彼の右の手を固く取り、国々を彼に従わせ、
王たちの武装を解かせる。
扉は彼の前に開かれ、どの城門も閉ざされることはない。
わたしの僕ヤコブのために、わたしの選んだイスラエルのために、
わたしはあなたの名を呼び、称号を与えたがあなたは知らなかった。
わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない。
わたしはあなたに力を与えたがあなたは知らなかった。
日の昇るところから日の沈むところまで人々は知るようになる
わたしのほかは、むなしいものだ、と。
わたしが主、ほかにはいない。

第二朗読 (使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 1章 1～5b節)

皆さん、パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリスト
とに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにある
ように。

わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなた
がた一同のことをいつも神に感謝しています。あなたがたが信仰によって
働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、
希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前
で心に留めているのです。神に愛されている兄弟たち、あなたがたが
神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。わたしたちの福音が
あなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、
強い確信とによったからです。

福音朗読 (マタイによる福音書 22章 15～21節)

そのとき、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい。」彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らは、「皇帝のものです」と言った。すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

皆様お元気ですか。急に寒くなってきましたね。今年の冬は訪れが早く、寒くなりそうですね。インフルエンザも流行りそうですから、コロナと合わせて注意しましょう。私は金曜日に予防接種をしてきました。接種希望者が多くてずいぶん待ちました。高齢者は無料ですから、早めに接種したほうが良いですよ。

さて今日は世界中の教会では「世界宣教の日」を迎えています。「宣教」とは、誰かがやればよいことではなく、またキリストの教えを解説することではありません。キリストを信じるすべての人の任務なのです。フランシスコ教皇様は世界宣教の日のテーマを次のように発表されました。「私がここにいます。私を遣わしてください」(イザヤ6. 8)と。また福岡教区のJ・アベイヤ司教様は「信仰をもってよかったと思う人は、どうして良かったかを伝えればよいのです」と仰っています。自分の言葉でキリストを伝えることが大事なのですね。今日の聖書朗読は私たちに何を伝えてくれているでしょうか。

第一朗読 (イザヤの預言 45章1,4~6節)

ここでは歴史上の人物とイスラエル民族を導かれる神との関係が述べられています。つまりイスラエルはそれまでの長い捕囚生活から新たな支配者ペルシャ王キュロスによって祖国に帰ることを許され、神殿建設も許されるのです。新たな王の到来。この時は外国の王の手によってイスラエルがいわば解放されたのですが、それは次に来るものを予感させます。すなわち、イスラエルの自分たちの王による開放です。イエスが生まれる前のイスラエルの人々の思いはそこにありました。民族としての外敵からの解放です。しかし神はその歴史の流れの中に、ご自分の計画を勧められていきます。新たな王は来る。イザヤ預言に続く答唱詩編では神を全世界の王として賛美する詩篇がうたわれます。「神は来られる。裁きに来られる」と。

第二朗読 (使徒パウロのテサロニケの教会への手紙 1章 1~5b節)

この手紙はパウロの手紙の中でも最も古いものとされています。パウロの手紙では教会の人々とのやり取りが述べられ、パウロが訪れた先々の教会の信徒と深い愛情によって結ばれていることが読み取れます。新約聖書には多くの手紙が残されていますが、この手紙というコミュニケーション手段が当時では大事だったのです。羊皮紙が使われたりしています。今はどうでしょうか。パソコンやスマホやそういうもので連絡を取り合っていますね。コロナの時代の今では顔と顔を合わせたの集まりは規制されていますので、リモート会議などが推奨されていますが、パウロも希望していたように、人々の集いに参加することが信仰を高め合うことに大事な要素であることは否めないでしょう。それは信仰というものが個人的な事柄に終わるものではないからです。この点を私たちは忘れないようにしましょう。

福音朗読 (マタイによる福音書 22章15～21節)

ファリサイ派の人々とのこの論争は有名ですね。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」。ここではデナリオン銀貨が問題になっていますが、イエスの言いたいことはもっと深いところにあるのです。当時の人々の信仰生活が実は、神のものではなくて人の思いに左右されていたことにあるのです。イエスは別のところで、神にささげる捧げものについて話されたときに、その捧げものを自分たちに都合のいいように解釈して、父母に対する義務を免除されるなどと考えていたことに怒られたのです。今でいう解釈変更、ご都合主義です。神を敬うことはどんな時代どんな状況にあっても免除はされないのです。「主の祈り」は冒頭にそのことを思い出させています。教会の建物を訪れることが困難であっても、自分の生活の中で神を敬い、その教えの中身である隣人に対する愛の行いは免除されていないことをしっかりと肝に銘じましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光